日韓関係とナショナリズムの「起源」1
―― グリーンフェルド「ナショナリズム三部作」の視点から

Japan-Korea Relationship and the 'Origin' of Nationalism 1: From the Perspective of Greenfeld's 'Nationalism Trilogy'

土佐　昌樹
Masaki Tosa

Abstract:

It is observed that the Japan–South Korea relations have recently deteriorated to the worst level since the decolonization. It seems that the sharp conflicts surrounding the territorial dispute and history issues have fueled the public sentiment of both countries, and completed an Ouroboros cycle of Korean anti-Japanese sentiment and Japanese anti-Korean sentiment. This vicious circle is a product of nationalism, which has developed with the process of modernization, democratization, and globalization. I would like to seek this problem by elucidating the 'origin' of nationalism in Japan and Korea. The 'nationalism trilogy' of Liah Greenfeld provides an innovative perspective to develop this endeavor. She presented a new interpretation of the birth of nationalism in England, which predated modernization and industrialization. So it is nationalism that defines modernity, unlike modernist theories of nationalism. Nationalism is mainly based on three principles: equality (and liberty), self-definition (identity), and secularism. It was a response to the contradictions of traditional society as it was declining. Once adopted, nationalism became the major source of radical transformation in human history. The obsession of economic development, or capitalism, is a good example. The secular concept of equality, unlike religious ideal, drives man to endless competition, and promotes the prevalence of madness. This magnificent theoretical perspective of nationalism will help understand the conundrum in the Japan-Korea relationship. This paper summarizes the outlines of Greenfeld's 'nationalism trilogy' for the next step of analysis.

Keywords: nationalism, Japan-Korea Relationship, Liah Greenfeld
キーワード：ナショナリズム、日韓関係、リア・グリーンフェルド

1．はじめに

日韓関係は戦後最悪の水準にあるといわれる。2015 年 11 月 1 日にソウルでおこなわれた日韓首脳会談は、それぞれの国内における「空気」を反映して 3 年半の空白をおいてようやく実現した。世論調査がおこなわれれば、どちらも過半数は相手に対して悪い印象を持っていることがあらためて裏書きされ、さまざまなメディアを全体的に見る限りでは自己反省より相手の過ちを糾弾する声が世論の主旋律となっている。出口のない領土問題や歴史問題を通じて両国の大衆感情が火に油を注ぎ合う展開を繰り返し、韓国の「反日」と日本の「嫌韓」がウロボロスの蛇のごとき悪循環を完成させてしまったかのようだ。新聞のような古典的なメディアはナショナリズムの克服をさかんに説いているが、そうした論調はマスメディア自身が報道する現実とずれているだけでなく、電子掲示板や SNS のように大衆感情の舞台となっているニューメディアの「空気」とあまりにもかけ離れている。

だが、およそ隣国関係には感情的な対立がつきものというのは世界史的な通例であり、好き嫌いの情緒を基礎にした議論にたいした意味などないと突き放すことも必要かもしれない。一方で、韓国で権威主義体制が民主化を犠牲にしながら目覚ましい経済成長を遂げていた 1980 年代までは、両国の草の根の交流を広げていくことが健全な日韓関係を築く基礎になると信じられていた。いまでもそうした提言はごく普通にみられるが、80 年代末に韓国でいわゆる民主化が実現し、大衆レベルにおける交流がいっきょに進んでからというもの、この見通しは現実から裏切り続けられることになる。年間数百万人が往復する膨大な人的交流や韓流に代表される活発な文化交流は、政治的対立を緩和するどころか、今日その温床となっているようにすら見える。グローバル化を背景にした自由な交流と情報化の進展は、一握りの為政者による強圧的な支配から大衆を解放したかもしれないが、同時に大衆の気分や気まぐれによって国際関係が左右されるリスクも内包することになったわけである。

インターネットを少し覗いてみるだけで、日韓のネチズンたちが独善的で排他的な毒舌を無責任にまき散らす様子はごくたやすく確認することができる。そうした声は仮想の時空で鬱憤を晴らすにとどまらず、現実の社会に影響を及ぼしている。いまや韓国の反日感情に負けず劣らず、日本側の嫌韓現象もヘイトスピーチを招く水準にまで一般化してしまった。歴史問題が大きな争点となっているとはいいながら、ついオルテガの古典的な大衆社会批判を想起せずにはいられない。「自分の歴史を持たない人間、つまり過去という内臓を欠いた人間」（オルテガ　2009: 20）が、「自分たちには喫茶店の話から得た結論を社会に強制し、それに法的効力を与える権利があると思っている」（オルテガ　2009: 57）。そのような大衆社会が東アジアでも日常的な風景となったのである。

オルテガが批判の矛先を向けたのは、19 世紀以降台頭してきた大衆が見るに堪えない現象をもたらしていた 20 世紀初頭のヨーロッパ社会であったが、伝統的身分社会の崩壊のあとにあらわれた大衆社会にたいする辛辣な声は、今日の東アジアにもぴったり当て嵌まるメッセージを含んでいる。政府主導の近代化や経済成長が先行し、短い期間で社会的文化的変貌を遂げたこの地域は、ようやく民主化を現実の果実として受け取りつつあるのだが、その負の側面もまた圧縮的に示している。民主化、大衆化の挙げ句の果てに、グローバルなメディア環境の力で内輪のおしゃべりが国際関係を左右しかねないのもその一例である。こうした事態を捉えるには、オルテガの批判精神だけではもはや足りない。

本稿は、日韓両国のナショナリズムを起源論的に問い直す作業の入り口として、理論的な展望を明らかにすることを目的としている。近視眼的な断定に陥りやすい隣国関係というものを、あえて「病根」と見なされがちなナショナリズムそのものを理論的・歴史的に大きな展望のなかで捉え直すことを通じ、より客観的な相互理解の糸口を見出すことにつながればと願っている。シリーズとして続編を書いていく予定であるが、最終的には日韓のナショナリズムがウロボロスの蛇状態となったのは最近の話でなく、歴史的かつ構造的な問題であり、そのことを解剖学的に理解する以外に解決の道はないことがはっきりするであろう。

2．近代性の母体としてのナショナリズム

21 世紀に入って日韓関係がむしろ後退したかに見えるとしたら、その要因にはそれぞれのナショナリズムが大きく作用していることは間違いない。しかし、そこにこだわることにどれだけ生産的な意味があるだろうか。なんといってもグローバル化の時代にわれわれは生きており、ナショナリズムのような古い想像力の枠組みにとらわれること自体が不毛な姿勢というものではあるまいか。そうした懐疑は当然ではあるが、だからといっていきなり東アジア共同体や世界主義といったものを掲げても、残念ながらこの地域にはそうした想像力を現実化する制度的な枠組みもなければ、情緒的な絆も希薄である。そうした理想論に高い意義を認めつつも、現実的にはまずむしろ過去にさかのぼってナショナリズムという怪物の正体を見極めることが未来への近道ではあるまいか。それが本稿の基本的な趣旨である。そのために、これまでのナショナリズム論とは少しばかり趣を異にした議論に注目したい。それが、日本ではまだあまり知られていないリア・グリーンフェルドの「ナショナリズム三部作」である。

グリーンフェルドは旧ソ連のウラジオストクのユダヤ系家族に生まれ、社会学と人類学の学位をイスラエルのヘブライ大学で取得し、現在は米国ボストン大学で社会学、政治学、人類学の教授を務めている。こうした多文化的な背景は、彼女の思索に広い視野を与え、すでに「現代で最も独創的な思想家の一人」と評されるに至っている[*1]。グリーンフェルドの「ナショナリズム 3 部作」とは、『ナショナリズム――近代への五つの道』（1992 年）、『資本主義の精神――ナショナリズムと経済成長』（2001 年）、『心、近代、狂気――人間的経験に対する文化の影響』（2013 年）の 3 冊を指す（以下、それぞれ『ナショナリズム』『資本主義』『心』と略記）。3 冊合わせて 1,700 ページを超えるボリュームを誇り、質量ともに大作と呼ぶにふさわしいナショナリズム論となっている。

『ナショナリズム』は、英、仏、独、露、米の 5 カ国における歴史を辿ることで、ナショナリズムの起源を具体的に跡づけた論考である。『資本主義』は、資本主義と経済成長の条件としてのナショナリズムの関係について、英、仏、独、日、米の 5 カ国の歴史を辿りながらマックス・ウェーバーの有名な問題設定を検証している。最後の『心』はもっとも大きな論争を呼ぶであろうが、ナショナリズムが堅固な政治的アイデンティティや経済成長をもたらしただけでなく、狂気を増殖させたという主張を英、仏、独、露、米の 5 カ国の歴史を辿ることで、やはり非常に緻密に例証した著作である。この 3 冊が含む複雑な論点や事実関係についてじっくり述べることは無理であるが、次稿以降につながる形で基本的論点をまとめておくことが本稿の目的である。

グリーンフェルドの主張の独自性は、まずナショナリズムの誕生が近代性に先立つと主張した点

だといえる。これまでの主要なナショナリズム論では、資本主義、都市化、産業化といった近代性がナショナリズムをもたらしたという説明が主流であった。A. スミスという孤高の例外を除き、近代以前にナショナリズムの「起源」を求める社会科学者は今ではほぼ皆無であるといってよい[*2]。近代性とナショナリズムの誕生が緊密に結びついているという点では（近代性のどこに焦点を当てるかが論者によって異なるが）主要なナショナリズム論と共通しているが、グリーンフェルドだけは順序の矢印が逆を向いているのである。

たとえば、ゲルナーは産業化や普通教育を通じた社会の均質化がすなわちナショナリズムの本質であると主張し、アンダーソンは出版資本主義こそが前近代の帝国的秩序をナショナリズムに転換した歴史的契機であると強調した。大衆社会論と結合したアンソニー・ギデンスのナショナリズム論もまた、その代表例といえるものであるが、要諦をまとめるなら次のようになろう（Giddens 1995）。

西ヨーロッパで 18 世紀後半から始まった絶対国家から国民国家への移行と、資本主義の勃興という同時並行的な現象は、世界資本主義へと拡張していく必然的な過程であった。資本主義の拡張は国民国家の中に「大衆」を生み、大衆の新たな「日常生活」を生み出した。大衆の日常は、一方で親密な私的・性的関係から成り、もう一方ではスポーツ観戦や政治的セレモニーといった「大衆儀礼」から成り立っている。それは道徳的な意味をはぎ取られた紋切り型の日課を消費することであり、そこに生きる個人にとっては「伝統」や親族の紐帯に守られた社会に比べ、「存在論的安心感」が低いものとなる。そのような状況で、以前の共同生活が与えてくれた「本源的感情」は、「伝統」の解体とともに「日常」に置き換えられたが、ネーションに対する擬似的な帰属感はそのことがもたらす不安を軽減する[*3]。

ここで、現代社会に見られるネーションという名の疑似共同体は、大衆の日常に対立するものであるが、いわゆる聖と俗、日常と非日常という、「伝統社会」を構成していたとされる弁証法とは無縁のものであることに注意すべきである。それは神話に似てはいても決してそれと同じではない。「伝統社会」における神話が弛緩した日常に対立し、それに意味を与える聖なる切断であるとすれば、大衆社会における「日常」はそのような聖の弁証法を破壊された後に広がる「均質で空虚な時間」（ベンヤミン）である。そこには本来の神話が機能し得る余地はないが、同時に大衆は聖なる意味を欠いた時間に我慢できない。そこでネーションが擬似的な神話として機能することになる。

こうした理論的展開は今日の多くの社会科学者に共有されている。ギデンスは、国民国家、資本主義、大衆社会といったものが「同時並行的な現象」であると述べてはいるが、全体的論述を追っていくとナショナリズムはあくまで近代性の欠落を埋める補助的な位置に置かれていることが分かる。多くの論者に見られる傾向だが、ナショナリズムは基本的に近代性の物語に従属するものであり、その歴史性と構築性を明らかにすることがナショナリズムの克服につながるという道徳的姿勢もそこから出てくるだろう。しかし、グリーンフェルドは、そうした関係を逆転させる。そのことは、ナショナリズムが世界でもっとも早く成立したとされる 16 世紀イギリスに目を向けると、自明の理となるという。資本主義も近代化もまだ始まる前にネーションという新たな観念が登場するのであり、その逆ではない。

そしてこの起源論は、東アジアのナショナリズムについて考えるときさらに説得力を増すのである。19 世紀の東アジアには西洋の科学技術、哲学、宗教、法制度、資本主義などが怒濤のように

押し寄せ、とりわけても植民地支配から逃れるためにいち早くナショナリズムで身を固める必要があった。日本のようにナショナリズムを社会の発展と結びつけることのできた例外を除けば、ほとんどが近代性の実現の前に植民地主義の餌食となった。今でも、ナショナリズムを肥大化させながら近代社会を築くまでの展望がつかめない地域も少なくない。そうした現実を前にすると、ナショナリズムが先で、それが成立した後に近代的な諸制度や、都市化、産業化、民主主義といった近代的現象が実現されていくという説明は、当を得たものだと思える。そして、そうした一群の巨視的な変化に含まれる、もうひとつ重要な症候がある。それが、狂気だ。

狂気の問題にたどり着くまでにはまだ準備が必要なので、まずは彼女のナショナリズム論の基本をおさえておきたい。ナショナリズムを構成する本質的特徴は他でもなく「ネーション」と呼ばれる政治的カテゴリーだが、それが成立する条件として最も重要なものは、次の３つだという。

・平等（と自由）
・自己定義（アイデンティティ）
・世俗主義

図式的に単純化して説明するなら、まず伝統社会における身分制の矛盾が平等の観念を押し上げ、それまで土地や身分に縛り付けられていた個人が主権者として登場し、自由な社会的移動が始まる。こうして社会に流動性が生まれ、分業や産業化が都市化と成長を加速させ、人びとは生まれでなく自分の業績や才能を基礎に自己意識を形成するようになる。この自己意識はネーションという平等な集団意識と緊密に結びついているのだが、歴史的には大衆が上層階級のアイデンティティを獲得するという形を取るため、威厳や自尊心がその特質となる。さらに、そうした社会意識と政治的カテゴリーの変化は、最初は中世的な宗教的概念をまとってあらわれたのだが、ネーションの観念が社会的に根付くにしたがって宗教的な衣装を脱ぎ捨て、世俗的な観念として独り立ちする。こうして、近代性に先立ちそれを実現する足場となる強力な観念が出現するというわけである。

実際にはこうした理論的図式が豊かな歴史的細部をともなって語られるので、話はそれほど単純ではないが、これは、どのナショナリズム論と比べても原理的な起源論だといえるであろう。活版印刷術の発明・普及が代表するメディア革命、分業化、産業化、社会的流動性、帝国の解体、血や骨の観念など、これまでナショナリズム論のキーワードとして注目されてきたものは、ナショナリズムの起源というよりはいずれもより根源的な要因から説明されるべき帰結や副産物ということになる。欧米の事例に遡り、もう少し具体的にグリーンフェルドの主張を追ってみよう。

３．イギリスの事例

英語でネーション nation という言葉は、歴史的にいくつかの目立った語義変化を経てきた。語源と見なせるラテン語の natio は、ローマから見て外国人集団を指す侮蔑的な言葉であった。出身地と結びついた外国人集団という意味が転じて、それは出身地別の大学生コミュニティを意味するようになり、さらに、出身地別のコミュニティを背景にした共通の意見をもつ人びとという意味になる。そうした意味上の変遷を含んだ natio という言葉だが、英語の nation の意味が決定的に変化するのが 16 世紀初期のことだという。

それまでのイギリスでは、ネーションとは高位の聖職者や議会の代表者など、政治的・文化的エリートを指していたのだが、貴族階級の間でネーションと「人民 people」を結びつけ、両者を同義語と見なす用法が支配的になる。それまで「人民」とは、下層階級を意味し、「庶民」や「平民」と同義だったが、この意味論的変化によりイギリスの全階級が主権と尊厳をそなえたエリートの立場に押し上げられることになる。さらにこの変化は、社会的流動性を合法化し、人は生まれでなく努力によって地位を移動することを可能にし、社会的現実に対するイメージを根底から変えたという。

ネーションの意味の変化と手を携えながら、「国 country」「コモンウェルス」「帝国 empire」といった関連する概念も変化し、16 世紀初頭から 17 世紀中盤までにはこの四つの言葉は、「イングランドの主権者」を意味する同義語になっていく。

こうした語義上の変化は、もちろん現実の変化をともなっていなければ根付くことはなかった。たとえば、土地の所有関係をはっきりさせた「囲い込み」は、土地のない貧農を生みだしたが、同時に社会的流動化を加速させ、裕福な小作民や地主になる者もあらわれ、なかにはジェントリーにまで上昇する者も増えていったという。そうした土地所有の移転に加え、さらに社会的平等化をもたらしたのが、教育の力だった。学校、大学、法曹院といった教育機関において、階級を超えた人材の交流が進み、有識層が形成されていった。生まれでなく学識によって人を見る傾向が一般化し、人びとはよりよい地位を目指して競争を始める。ネーションの概念が上層階級だけでなく、成長しつつあった中産階級も惹きつけるようになる。

貧しい職人の息子に生まれながら、国王の側近にまで駆け上がったトマス・クロムウェル（1485 ～ 1540）は、その好例である。彼は、ローマ・カトリック教会から国王が長を務めるイングランド国教会を離脱させ、イングランドの王権を強化することで国民国家の基礎を用意することに貢献する。『ユートピア』の著者で知られるトマス・モア（1478 ～ 1535）は、大法官の地位を退いた上でそうした動きにカトリック信徒の立場から反対し、処刑された。グリーンフェルドは、英国の事例について述べた『ナショナリズム』の第一章を、死刑を覚悟したモアからクロムウェルに宛てた書簡の引用から始めているが、そこにはローマ教皇が体現する古き世界の一体性とナショナリズムという新たな世界観との断絶が見事に表現されている。

こうして流血の代償をともなって産声を上げたナショナリズムだったが（クロムウェルも最後は失脚して処刑され、モアと同じく生首がロンドン橋に晒しものになった）、当時は社会のあらゆる領域で宗教の役割が大きかったので、ネーションをめぐる議論も常にプロテスタンティズムの衣装をまとってあらわれた。たとえば、「神はイギリス人だ」という選民思想をともなって、ネーションの神聖性が表現された。しかし、それは民族性と結びついた観念でなく、あくまで「合理的な（それゆえ自由と平等に値する）個人」に基礎を置く宗教的・政治的価値こそが重要だった。だから、あらゆるイギリス人は、プロテスタントであろうがなかろうが、一つのネーションを構成することができたのである。

イギリスのナショナリズムを考えるときに、とりわけ重要なのは「理性」や「合理性」が果たしている中心的役割である。理性は人間にとって「神聖なる本質」であり、言語がその召使いだと考えられていた。理性は権威に対する反抗を肯定し、また懐疑主義と経験主義が組み合わさることで、イギリスに特有の哲学的な立場が生まれた。

合理主義は、自由な思想を意味した。懐疑主義は、独善を排し、他者の意見に対する寛容を要求した。経験主義は、知的貴族制の観念を解体し、正常な人間的感覚をもつ者なら誰であれ、人間性の進歩が依存すると考えられた真の知識を獲得する能力が等しくあるはずだと見なした（Greenfeld 1992: 79）。

こうした哲学的立場の具体的表れとして科学があり、それはイギリス人の揺るぎない自負心の源泉となった。そうした自負心はニュートン（1642 ～ 1727）やボイル（1627 ～ 1691）などの代表的な科学者が残した言葉からも確認できるが、大切なのは具体的な実績が生まれる前からすでに「科学的なネーション」としての自己定義と自負心が存在した点である。徹底して個人の自由と平等に立脚した理性の民としてのイギリスの国民意識は、半ば宗教的な水準にあるものだったが、国外に伝わっていくにしたがい、また別の反応を呼び覚ますことになる。

4．ナショナリズムの伝播とルサンチマン

ネーションの観念は、先進国イギリスに対する憧れや嫉妬と相まって、それが伝わる地域に複雑な感情を呼び起こした。その感情をグリーンフェルドはルサンチマン（怨恨）と呼んでいる。これはキェルケゴールやニーチェによっておなじみになった概念ではあるが、一般にフランス語のまま使われていることからも分かるように、もともとはフランスの歴史的文脈に根ざす言葉である。

フランスは今でもカトリックに対する信仰の篤い国だが、中世には「良きフランス人」とは「良きクリスチャン」と同じ意味であった。「愛国心」とは、生まれ故郷と天国との結びつきに対してキリスト教徒がいだく限定的な感情であったのであり、16 世紀になるとそれが国王に対する伝統的な忠誠と等値されるようになる。いわゆる絶対王政の時代に入り、没落しつつあった貴族が危機感から引き起こしたものがフランス革命だったが、それは大いなる反動を呼んで王権をさらに強化した。こうした過程でイギリスから移植されたネーションの観念は、王の絶対的な権威と結びつけられる。フランス社会にそれが根づくのは革命に先立つ 1750 年くらいだが、エリートの精神に根本的な変化を引き起こす過程で、元々の意味とは大きく変質していった。

それを一言でいうと、「ルサンチマンの哲学」ということになる。イギリス的な価値を拒否し、転倒させるという精神の動きは、フランス革命の基本原則をあらわした「人間と市民の権利の宣言」にはっきり認められる。「自由、平等、友愛」のスローガンで知られるこの宣言は、イギリスのネーションが持っていた個人の自由と平等という考え方を転倒した形で引き継ぎ、超人的で集団的な人格に座を譲っている。「ネーションの観念は国民的統一の理想に取って代わられ、そのことが「友愛」と呼ばれた。平等は均質性に置き換わり、自由は主権や一般意志の…自由に置き換わった。集団性が個人を圧倒した」（Greenfeld 1992: 179）のである。

ロシアでは、ピョートル大帝（1672 ～ 1725）の時代に西欧化が進められ、ネーションの観念が上から広められた。それ以前には受け皿となる知識人層もなく、世俗的な学校が設立されるまでは神学セミナーで学ぶしかなかった。「祖国」や「人民（ナロード）」といった概念も上から強調されたのだが、18 世紀末になると貴族とそれ以外の知識人層の間で、国民意識が芽ばえるようになる。しかしその焦点は、やはり西洋先進国に対するルサンチマンの感情だった。

個人の理性は否定され、ヘーゲル流の精神や「魂」の深遠さが強調された。「ロシアの国民意識を煽ったのはルサンチマンであり、社会的関心ではなかった。農民をロシアのネーションの象徴としたのもルサンチマンであり、農民に対する共感ではなかった」（Greenfeld 1992: 258）。ロシアのネーションは、個人でなく集団的人格から構成され、民族的で精神的な側面が強調されるという特徴を持つ。そうして結晶化していくロシアのナショナリズムは、後の社会主義革命の核となるのである。

ドイツの例は、さらに急進的な展開を示した。1806 年以前にドイツの国民意識について語ることはできなかったのに、1815 年にはすでに成熟の域に達していたという。その最大の要因は、ナポレオン軍によってプロイセンが敗れ、保護国化されるという屈辱だった。ドイツのナショナリズムを率いたのは、貴族でなく中産階層の知識人で、彼らの経済的・精神的苦境がドイツ的な個性を育むことになった。教育を通じて獲得した自己評価と客観的な地位との大きな食い違いは、苦悩と浮遊するアイデンティティの発生源となり、ナチズムに至る極端なナショナリズムの温床となる。

ドイツ的な特徴をさらに際立たせる重要な要因として、「敬虔主義」と「ロマン主義」があった。前者はキリスト教信仰における内面的心情を強調する立場で、理性や啓蒙主義に対する拒否を意味した。ロマン主義は、一種の世俗宗教として、合理主義に対抗して精神的個性や天才の役割を強調した。この両者の結合がドイツのナショナリズムを鍛え上げ、政治的関心すら視野の外におくことを可能にした。「ネーションは、民族（Volk）の同義語となり、もはや国家から離れて人民の内的統一と精神をあらわすことになった。それは、精神と統一性の直接的な具現であり。敬虔主義の見えない教会を彷彿とさせた。国家はその外的構造をあらわすものに過ぎなかった」（Greenfeld 1992: 364）。ナショナリズムは、ドイツのその後の歴史を大きく左右したが、その中には近代を準備する原理そのものを否定する契機が含まれていたのである。

グリーンフェルドが挙げた例のなかで、アメリカだけがルサンチマンによって歪められることのない形でイギリスのナショナリズムを受け継いだ。それは、イギリスよりさらに個人の自由と平等を強調するおそらく地上で唯一の社会となった。その理由は、イギリスからの最初の入植者がすでにネーションの観念を身につけており、それが国づくりの出発点となったからだという。イギリスからの分離独立を目指す独立戦争も、イギリス的価値の否定という方向に向かうことはなかった。なぜなら、理想や国民的価値に対する忠誠こそが、イギリスからの独立を支えたのだが、それはまさにイギリス的な価値の実践にほかならなかったからである。こうしてイギリスからの分離独立は、その否定でなく、むしろ「イギリス的価値の普遍化」（Greenfeld 1992: 423）に貢献した。しかし、他方でアメリカは、奴隷制という自らの理想を裏切る内的矛盾を抱え込み続け、また個人主義が内包する狂気をより過激な形であらわにする社会を実現していくことになる。

5．狂気とナショナリズム

グリーンフェルドは次に、資本主義とナショナリズムの関係について歴史的な探求を進める。ナショナリズムとは、「16 世紀初期のイギリスで生まれた特異なかたちの社会的意識」であり、その中核には平等性に基礎を置きながら人を競合へと駆りたてる観念があった。それこそが、すなわち「持続的な成長」への強迫観念をもたらし、また狂気の問題へと直結する「集団意識の新たな世俗的形式」であった。

前者は、M. ウェーバーによって定式化された問題設定である。いわゆる伝統社会では、労働生産性が上がっても人はより多く働いて富を増やそうとする代わり、一定の利益を確保できればより少なく働こうとするであろう。勤労と富の蓄積の結合に高い価値が認められるという精神的な転換が起きてこそ、資本主義は誕生することが許される。それがウェーバーのいう「資本主義の精神」であり、カルヴァン主義やアメリカのベンジャミン・フランクリンにその歴史的実例が求められた。

グリーンフェルドは、その後さまざまな批判が表されてきたこの問題設定を継承し、ナショナリズムの名の下で再生させた。「資本主義の精神とは、ナショナリズムのことである。ナショナリズムは、成長する近代経済の背後にある倫理的な推進力であった」(Greenfeld 2001: 58)。

こうした観点からあらためて欧米の資本主義の歴史を再検証したグリーンフェルドは、日本の事例についてもかなり詳細に扱っている。そして、江戸時代の国学的な神国意識をナショナリズムと等値することを否定した上で、ビジネスと戦争を結びつける意識を鼓舞した福沢諭吉や四民平等と富国を結びつけた渋沢栄一の言説などを具体的に検証しながら、明治の早い時期に持続的成長や軍事的膨張と進歩が同一視されるナショナリズムが日本で成立した事実を示している。歴史的細部については検討を要する部分も含まれており、事実さまざまな議論を呼んできた[*4]。しかし、ここでは大まかな流れを追うことを優先し、話を進めたい。

ナショナリズムが人間の歴史に決定的な変化を及ぼしたという大きな問題を主に政治と経済の次元で検証したグリーンフェルドは、最後に精神に向かう。「人間の意識こそが歴史の主題である」というフランスの歴史家、マルク・ブロックの言葉を頼りに、非常にスケールの大きい思索の航海のなかで狂気の問題を浮き彫りにしようとしている。

ナショナリズムが狂気をもたらしたというとき注意しないといけないのは、それ以前の人間社会にも狂気はあらゆる形で名づけられ、認められていたという事実である。しかし、ナショナリズムの出現によって、何かが決定的に変化したという。端的にいえば、狂気とは、ナショナリズムの本質である平等性と世俗化によってもたらされた社会的アノミーが生み出したものである。その場合、彼女のいう狂気を先天的な知的障害や遺伝的原因がもたらす症状と区別しないといけないが、そのためには特定のカテゴリーやレッテルとして位置づけることが非常に難しい問題だという点を理解する必要がある。

その点をはっきりさせるため、彼女は、現代の精神医学で最大の問題になっている鬱病（単極性鬱病）、躁鬱病（双極性鬱病）、統合失調症（精神分裂病）をめぐる専門的議論の森に踏み入っていく。ここは簡単に要約できる部分ではないが、結論として重要なのは、それらの病名は特定の生理学的要因に対応しているのでなく、あくまで社会文化的に構成されたレッテルであり、実体としては同一の「病」に他ならないという点である。とりわけ、双極性鬱病と分裂病は同一の病であり、両者の違いはステージや深刻さの程度に過ぎないという。複雑さのスペクトルでは分裂病がもっとも複雑な極に位置し、単極性鬱病は最も単純な極（しかし最も重症）に位置し、双極性鬱病はその中間に位置する。

こういった議論は、精神医学の専門家のなかでも支持する人が少なくないが、その先になると精神医学と社会科学で大きく見解が分かれることになる。すなわち、前者は疫学的なアプローチを取るため、特定の病には特定の生理学的原因が存在するという前提を捨て去ることができない。しか

し、心や精神は、一方で生理学的現象であり、同時に社会文化的現象であることは否定できない。そのため、現代社会に蔓延するほとんどの精神病は、社会文化的に生みだされているといってもかならずしも荒唐無稽な議論でない。人間にとっての現実とは、自然科学的な次元にとどまらず、象徴的に構成された世界であるという主張はもはやお馴染みのものである。グリーンフェルドは、さらにもう一歩踏み込んで、心とは「脳の中の文化」であり、「個人化された文化」であると主張する。一方で、文化とは「集合意識」ということになり、心と社会との関係は密接に結び合わさった不可分のものとして位置づけられる。

それゆえ、狂気とは、心と文化の関係が「異常」になることであり、心としての「脳の中の文化」と客観的な文化との対応が持続的に混濁したりずれてしまうことを意味する。こうしたことは様々な要因で起きえるが、それを一挙に加速させたのがナショナリズムだというわけだ。すなわち、平等の観念が広まることで、人びとは伝統的な身分や土地から離れて自由な移動を始め、一人ひとりが主権をそなえた主体として自由な競争を始める。こうした社会的流動性は、社会に大きな活力を与えるが、一方で多くの個人に不安と苦悩をもたらす。なぜなら、伝統的な宗教が理想として謳い上げる平等と異なり、近代的な平等性とは、結果でなく条件の平等であり、彼岸的でなく現世で実現すべき強迫的な観念だからだ。この平等はむしろ格差や不平等の源泉となるのであり、競争から脱落した者は、もはや身分や運に失敗を帰することができず、自分自身のアイデンティティとしてそれを引き受けるしかなくなるのである。

狂気の温床となるそうした社会的環境を、彼女はデュルケームにならって「アノミー」と呼んでいる。デュルケームは、有名な『自殺論』のなかで、自殺率は国ごとで安定した比率を見せる傾向があるが、社会的混乱が激しくなったときだけ急カーブを描くことを示した。そうした状況をアノミーと呼び、通常なら機能している社会の個人にたいする拘束力が減退するからだと主張した。

> 人間の感性は、それを規制しているいっさいの外部的な力をとりさってしまえば、それ自体では、なにものも埋めることのできない底なしの深淵である。／そうであるとすれば、外部から抑制するものがないかぎり、われわれの感性そのものはおよそ苦悩の源泉でしかありえない。というのは、かぎりなき欲望というものは、そもそもその意味からして、充たされるはずのないものであり、この飽くことを知らないということは、病的性質の一徴候とみなすことができるからである（デュルケーム　1985: 302）。

19 世紀のヨーロッパ社会を対象としたこの研究は、アノミーが商工業の世界をはじめとしてすでに恒常的要因となっていること、また「どこの国でも、自殺がもっとも蔓延しているのはもっとも文化のすすんでいる地方である」ことなど、現代にもつながる観察を残している。さらに、アノミーが原因で起きる自殺をアノミー的自殺と呼び、その特徴について次のように述べている。

> それ〔アノミー的自殺者の情念〕は、怒りであり、また失望にともなってふつう芽ばえてくるあらゆる感情である。…あるときには、生一般への冒涜や激しい非難であり、またあるときには、みずからに与えた不幸の責めを負うべき特定の人物にたいする威嚇や怨恨である。…自殺者の憤怒がこれほど明瞭にあらわれる自殺もほかにない（デュルケーム　1985: 356）。

これは、まさにグリーンフェルドのいうルサンチマンである。デュルケームの理論にはなかった見取り図だが、グリーンフェルドによればそうしたルサンチマン、狂気、自殺、アノミーの「主犯」こそがナショナリズムに他ならない。このことをさらに具体的に見るため、彼女は再び16世紀のイギリスに目をやる。

当時のイギリスにおける狂気の実態を探るため、彼女はその頃始まった近代詩やシェイクスピア（1564 ～ 1616）の作品のなかに、狂気の表現が色濃く表れていることを具体的に示している。たとえば、『ハムレット』（狂人の振りをする王子）と『リア王』（老王の発狂）は狂気そのものが主題となっており、シェイクスピアの天才がこの歴史的事実を作品に刻み込んだのだという。

> 社会関係の不安定さや個人的きずなの予測不能性のため堅固なものが何も見当たらず、それ故に誰もが不安にさせられて社会の中にしっかりした足がかりを得られない。別の言葉でいえばアノミーであるが、これこそがリア王とハムレットの悲劇の根源である（Greenfeld 2013: 391）。

17世紀になるとイギリス人の風変わりな様子は周知の事実となり、イギリスを訪れた外国人は、しばしば「イギリス病（English malady）」について証言を残している。脾臓を意味するspleenという言葉は、イギリス人特有の癇癪の意味として翻訳されずにそのまま外国でも通用していた。18世紀初頭の旅行記を引用しながら、「自由と財産を持ち、日に3度の食事を享受している」にもかかわらず、「イギリス人が世界で最も不幸な人びとである」ことにフランス人が驚きを隠せない様子を紹介している。当時はイギリス人の自殺率の高さも名高いもので、狂気、鬱病、癇癪といった特徴を持つイギリス人の精神のあり方はフランス人にとって不可解きわまりなかったといいう。

ところが、フランス革命を境に事情が変わる。フランス人はその時初めて、ナショナリズムとアノミーの嵐のなかで狂気を内側から理解したというのである。イギリスと同じく、狂気、なかでも鬱病はまず有識者層を襲い、とりわけ作家がその犠牲となった。19世紀になると、バルザックやシャトーブリアンといった偉大な作家が繰り返し狂気と天才について語っている。

ドイツやロシアについても、特有のあらわれを見せながら、ナショナリズムの到着と相前後して狂気の蔓延がみられた。とくにマルクスの言説についてはかなり詳細に検証しながら、有名な疎外の概念が分裂病の症状と驚くほど類似している点について具体的に論じている。ここでは残念ながら省略せざるを得ないが、これは社会主義革命を一種の狂気のあらわれとみる彼女にとって大切な論点を構成している。

狂気の問題を追究するときに、もっとも先鋭的なあらわれをするのがアメリカの事例である。上流階層と精神病が密接な結びつきをもっており、さらに平等性が地位を不安定にすることで狂気があらわれやすくなるという論点を具体的に示すため、彼女は映画『ビューティフル・マインド』で一般にも知られるジョン・ナッシュの事例をかなり詳しく分析している。上流階層出身の天才として若いころ持てはやされたナッシュは、アノミーによるアイデンティティ崩壊から分裂病発症にいたり、年老いてから快癒して最後はノーベル賞を受賞するという劇的な人生を歩んだ。

アメリカの代表的な心理学者、ウィリアム・ジェームズ（1842 ～ 1910）は夏目漱石など日本の

知識人にも影響を与えた人物だが、自分自身が「神経衰弱」と診断されこの概念を広めることに貢献しただけでなく、それを「アメリカ病」と名づけたことでも知られている。アメリカ医学心理学会の機関誌、*American Journal of Insanity* は、19 世紀を通じて狂気が文明病であることをくりかえし強調していた。当時の著名な精神医学者、エドワード・ジャーヴィス（1803 ～ 1884）は、精神病医となることで自分自身の狂気を治癒する道を見つけたことが知られているが、精神病患者の比率が文明の程度の指数であることを信じていた。

こうした考えは、アメリカに特有のものだったわけではなく、フランスの精神医学者エスキロール（1772 ～ 1840）は、「狂気は文明病であり、狂人の数はその進歩と比例する」といい、ドイツの博物学者フンボルト（1769 ～ 1859）は、精神病は文明国ではよく知られているが、野蛮国ではほとんど見られないと断言した（Greenfeld 2013: 582）。

アメリカは世界的に早い時期に精神病施設を整えたことが知られているが、独立戦争の前にはそうした施設はほとんど存在しなかったという。グリーンフェルドの考えによれば、狂気の蔓延は文明というよりはナショナリズムこそがその温床だったということになる。そして、平等性にもとづく熾烈な競争に駆り立てられることで、個人を狂気に引き寄せるアノミーが激しくなる傾向は、今日のアメリカでも衰えるどころか悪化しているというのだ。

「最近のもっとも権威ある統計によれば、〔アメリカにおける〕分裂症と躁鬱病の発生率は、誇張抜きでほとんど破滅的といえるような比率に近づいて」おり、「10 人に 1 人、ないし 5 人に 1 人のアメリカ人は…狂人になる傾向をもっている」とまでいう。一般に「普通の」社会で精神病になる確率は 100 分の 1 くらいだという説を信じるなら、「精神障害は、現実としてアメリカの若者にとってもっとも切実な慢性疾患である」という専門家の主張は決して誇張ではないと彼女は結論づける（Greenfeld 2013: 549-50）。これがナショナリズムの「贈り物」だとするなら、先を争ってそれを受け取ろうとする社会があるだろうか。

次稿は、以上のような理論的展望から日韓のナショナリズムの「起源」を捉え直す試みとなる。

＊1　http://liahgreenfeld.com/about-2/

＊2　A. スミスは、ネーションやナショナリズム成立について近代に大きな歴史的断絶を認める立場を「近代主義者」、古代からの連続性を強調する立場を「永続主義者」と呼び、自分自身はその中間の立場であることを繰り返し述べているので、多くの面でかならずしもグリーンフェルドの主張と対立するわけではない（スミス　1999）。ただ、しばしば指摘される通り、アンダーソンやゲルナーに対する批判を含んだその立論はあまり明確ではない。

＊3　ゲルナーは、客観的機構としての国民国家と本源的感情に依存したナショナリズムを区別することが重要といっているが、その議論はここでは触れない。

＊4　たとえば、イギリスの事例については、Hastings, A.（1997）, Kumar K.（2003）など。しかし、狂気の問題まで含めた彼女の壮大な理論的パノラマに対する有効な批判は今のところ見当たらない。日本における紹介や検証の試みも、管見によれば基本的にイギリスの事例に限った扱いとなっている。

引用文献

オルテガ（2009）桑名一博訳『大衆の反逆』白水社

スミス、A.（1999）巣山靖司他訳『ネイションとエスニシティ―歴史社会学的考察』名古屋大学出版会

デュルケーム（1985）宮島喬訳『自殺論』中公文庫

Giddens, A. 1995.“The Nation-State Nationalism and Capitalist Development”. In *A Contemporary Critique of Historical Materialism. Vol. 1*. 2nd edition. London: Macmillan. pp 182-202.

Greenfeld L. 1992. *Nationalism: Five Roads to Modernity*. Cambridge: Harvard UP.

---- 2001. *The Spirit of Capitalism: Nationalism and Economic Growth*. Cambridge: Harvard UP.

---- 2013. *Mind, Modernity, Madness: The Impact of Culture on Human Experience*. Cambridge: Harvard UP.

Hastings, A. 1997. *The Construction of Nationhood: Ethnicity, Religion and Nationalism*. Cambridge University Press.

Kumar K. 2003. The *Making of English National Identity*. Cambridge University Press.